「今日の説教、聴き手のために」　2014/9/14　明治学院教会

(講壇-6)　岩井健作（前牧師）

『言葉が力を与えられる時』

ヨハネ１４章２５節－３１節

「わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる」（２６）

１、イエスの言葉には人を動かず力がありました。「その教えにひどく驚いた。それは律法学者のようにではなく、権威（エクスシア）ある者のように教えられたからである」（マタイ 7:28)。例えば「あなた方は地の塩・・世の光である」といわれ民衆は、生きている価値を自覚し元気が出たのです。その言葉も、イエスの死で過去のものとなってしまいます。過去の言葉がなお力をもったのは、そこに人格の関係が今もあるからです。その関係の背後には見えざる「神の力」があるからです。

２、今日のテキストの「これらのことを話した」(25)は生前のイエスの語られた言葉を意味しています。それらが弟子たちの現在になお力を持ったのです。それは過去が現在に生きているからです。森有正氏（1911-1976 哲学者『遥かなるノートルダム』）は、氏独特の用語法ですが、人はあることを体験したままでは、それはやがて過去になる。しかし、「体験」したことがもし「経験」になるなら、それは現在の力となる、と言っています。イエスの言葉も、それぞれの人生の「経験」となる時、新たな力となるのではないでしょうか。私たちが、信仰生活の中で「御言葉に生かされる」といっている出来事です。聖書の言葉が今の生活の文脈に生きて働く経験です。例えば「苦しむ事も恵として与えられている」（フィリ１：２９）に、励まされて経験がるでしょう。

３、ヨハネ福音書はその出来事を「助け主」即ち「聖霊」(14:26)の働きだと解説しています。「わたしがはなしておいたことを思い起こさせる」という言葉です。神学者ボーレンは「聖霊とは、言葉を与えるものだ」といっています（使徒２章など参照)。聖霊はイエスの言葉を過去のものとして理解させるのではなく、言葉を現在の力として働かしめる（想起させる）ものだということです。

４、「聖霊を受ける」ことで、私たちは、イエスの出来事を大胆に再解釈し、現在化し、経験化させられるのです。例えば「思い煩うな」は、重い現実を相対化します。それは自分の言葉をもつことです。その時、人は２７節のごとき「平安」（心を騒がせない生き方）を持つでありましょう。「助け主」はその事を起こさせます。聖霊は私たちの側の意識を越えて、神が働きかける関係です。別の表現では、イエスが共にいます安らぎです。言葉が力を持つのはその証しではないでしょうか。

５、「疲れたでしょ」。これはむしろ病人に父から発せられるべき言葉でした。だが、これが父への彼の最後のことばになりました。先天性の心疾患、４才での大手術、併発する癲癇を抱えて酪農大学卒業までの学び、輸血によるＣ型肝炎から肝臓癌、病気を隠さないで済む共働学舎での生活、ホスピスで終わる４４才。『独立教会教報』(328 号)でＹ．Ｋさんの、葬儀・追悼号を読みました。人生最後に力のこもった、身近な者への労りのある自分の言葉を発するＹさんのその生き様に感動させられました。